

# 難波 渦



題字 浅野鈴秀氏 (日本書芸院一科審査員)

## 特集

第2回NOCHS文化遺産学フォーラム

### 「大阪と沖縄の文化遺産」

2005年 11月 12日 (土)

会場：文学部第3会議室



2005年11月12日(土)、関西大学文学部第3会議室において、第2回NOCHS文化遺産学フォーラム「大阪と沖縄の文化遺産」が開催されました。ゲストに文化庁記念物課名勝部門主任調査官・本中真氏と、琉球大学法文学部教授・高良倉吉氏を迎え、それぞれ文化遺産の現状についてご講演いただき、センター長・高橋隆博が、文化遺産学とはどうあるべきかという講演を行いました。

また、当日は牧村史陽氏のご遺族の方から寄贈された大阪の古写真のうち、撮影場所が特定できたものを中心として、15点を四つ切りサイズに引き伸ばして展示しました。

本中真氏の基調講演「日本の文化遺産と文化的景観の保存について」は、文化財保護法の改正で取り上げられた「文化的景観」をキーワードに、さまざまな事例を挙げながら展開しました。「文化的景観」は文化財保護法第2条で「地域における人々の生活又は生業及び当該風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のために欠くことのできないもの」と定義されています。これまでの史跡名勝天然記念物の評価制度の中では捉えきれなかった性質を持った土地を、文化財として取り扱うという試みがなされており、世界遺産の分野でも大きな流れになりつつあるとのことでした。

文化的景観を保護するために必要なことは、その景観の価値をその土地の人に気付いてもらうことなのだと思います。保護のために強い規制は必要ないのだそうです。なぜなら、文化的景観は、その土地で現在行われている利用形態をそのまま継続していくことが重要なため、それができなくなるような規制は不要だからです。そのような緩やかな規制の下に、個人の墓や戦争に関する遺跡、都市公園なども登録の対象にできるのではないかと思います。

大阪における文化的景観の事例として挙げられたのは道頓堀、御堂筋、中之島公園、通天閣と新世界などでした。確かにどれも大阪を代表する場所です。それらを群として組み合わせ、空間的な広がりを持つ総体として評価し、保存・活用する視点が大切だということでした。これは、これからの当センターの活動方針とも深く関わるのではないかと思います。



高良倉吉氏には「沖縄の文化遺産とその復興」というタイトルで、首里城の復元をめぐる状況を中心に、沖縄の文化遺産の現状について具体的なお話を聞かせていただきました。

琉球処分から、太平洋戦争終結までを「失われた66年」と呼び、その間、博物館や美術館のよ

うな文化遺産の調査・収集を行う施設が無かったことが、戦後流出した文化遺産を特定できない要因になったということです。文化遺産として何が存在したのかという基礎情報がないため、何が流出したのかわからないのです。現在は市町村史編纂事業で掘り起こされた地域の持つ情報を元に、流出した文化遺産を取り戻す事業も行っているとのことでした。

首里城の復元は、「新車の首里城を復元する」というコンセプトで行われ、困難なプロジェクトの中で、具体的な状況がわかってきたということです。現在も復元事業は続いており、ソフト面では「首里城公園友の会」という市民の立場で首里城を勉強する会と、「首里城研究会」という専門家からなる研究会の二つがあるそうです。

「首里城基金」の話も大変興味深く聞かせていただきました。これは市民や企業からの寄付や、首里城の入館料の一部を繰り入れる形で成り立っているもので、これを使って流出した文化遺産の情報収集や買戻しを行っているとのことでした。これは、人びとに文化遺産との関わりをわかりやすく実感してもらえるという点においても、実に画期的なシステムではないかと思います。



高橋センター長の講演は「なにわ・大阪の文化遺産の可能性」というタイトルで、「文化遺産学とは何か」ということがメインテーマでした。

ここでは「文化」について、ラルフ・リントンの『文化人類学入門』を引用したのち、「二人以上の複数の人間が分有している生活様式」と明快な定義づけがなされました。また、「文化遺産学」というのは新たに生み出された言葉で、今まで各方面から「それはいったいどのような学問なのか」という疑問が投げかけられていましたが、これについてもこの場で定義づけがなされました。それは「何が文化遺産なのかを考える作業が文化遺産学であり、どのように研究していけばいいのか、その方途を探ることこそが文化遺産学なのです」というものでした。

本中氏、高良氏のお話ともリンクする部分だと

と思いますが、文化遺産は地域の財産であり、決して一部の研究者・専門家だけのものではないという主張もありました。文化遺産を地域に根付かせることが文化遺産の保護につながるというのは、当然のことのようであるにも関わらず、今まで無かった視点だったように思います。

また、高橋センター長は大阪文化遺産学の構想は、大きく二つのことに収斂できるといいます。ひとつは、すべての文化遺産を文化資源と考え、次世代に継承していくこと。もうひとつは、その文化資源を核として地域の活性化に寄与する途を探り、提示するということでした。

非常に多岐にわたる文化遺産を、身近なところから始めて、次第に広がりを持たせ、それらを構造的に研究し、それを社会に還元していく。それがなにわ・大阪文化遺産学の役割であるということなのでしょう。

## アンケートより

- ・ 大変勉強になった。近代合理主義の行き詰まりの中、単なる懐古ではなく温故知新を实践して新しいものを創造する「学」と感じた。特に沖縄は現在と未来を生きる上での文化的アイデンティティの獲得と結びついていることに感銘を受けた。
- ・ 本中先生が話された、「文化遺産である周辺の環境をいかに保護していけるかが今後の課題」に共鳴した。
- ・ 道頓堀川や新世界は、これから再開発されるべきだと考えていたが、景観として眺める考え方は斬新でした。
- ・ 沖縄文化遺産の歴史的悲劇を初めて知り、悲痛な思いだった。
- ・ 文化財やその保護を通じて、その場所に住む人との関係の重要性を改めて感じた。
- ・ 非常にわかりやすい話で、楽しく聞くことができた。センターの今後の活躍を祈っている。
- ・ 折角の大阪の文化遺産についてのフォーラムであるのに、意外に参加者が少ない。一部の研究者や好事家だけのフォーラムでは意味がない。もう少しPRが必要ではないだろうか。
- ・ 研究成果の適宜公表を期待する。
- ・ 「大阪といえば」と誇れる文化について行ってほしい。
- ・ 大阪の古写真展を見学し、特に地域（大阪）と結びついた歴史の変遷を蒐集し、体系化していただければ地域人としての認識が高められる。
- ・ 自分は九州の出身で、昭和32年に大阪に来た際、先輩にキャバレー・メトロに連れて行かれて、飲酒で前後不覚の記憶があったことを写真を見て思い出した。

アンケートへのご協力ありがとうございました。

(文責：R.A. 宮元 正博)



## なにわ伝統野菜 VS 京野菜 —復興のなにわか伝統の京か—

2006年1月14日（土）  
於：関西大学図書館ホール

2006年1月14日（土）、関西大学図書館ホールにおいて、第2回NOCHSレクチャーシリーズ「なにわ伝統野菜VS京野菜—復興のなにわか伝統の京か—」が開催されました。講演は、大阪府立食とみどりの総合技術センター・野菜園芸グループリーダーの森下正博氏と野菜文化史研究センターの久保功氏に依頼しました。

当日は、野菜に対するアプローチの仕方は異なっていますが、机上の学問ではなく、地域において実際に取り組んでおられるお二人のお話を聞くことができました。また、大阪の伝統的「文化遺産」を食の面から考える良い機会となりました。参加者は72名でした。

### 「なにわの伝統野菜のもつ今日的意義

—なにわの伝統野菜で大阪を「しんか」させよう—

大阪府立食とみどりの総合技術センター

野菜園芸グループリーダー 森下 正博



伝統野菜というのは、現在の大量生産、安定供給になじまない。田辺大根、天王寺蕪、玉葱など、非常に不揃いで商品として取り扱う時に非常に不便なんですね。在来品種は、非常に個性が強いですから、料理であったり、加工品であったり、出口をみつけてやって、「じゃあこんないっぱい使ってみたいな、こんな加工品作ってみたいな」という求めが出てきたら、農家の人に「ちょっとこれだけ欲しい言うてはんねんけど、作ってくれへんかな」という声をつなげる。そういう形でまさに点と点を結びながら在来品種の持つ良さを、味・香りなどいろいろな面を活かせるという取り

組みをさせてきてもらっています。伝統野菜のお酒、あるいはおかずとか塩昆布とか飴とか商品開発による出口を作ってやることによって、こんな風に商品化していただくと「あのいぐんでた大根、こないなったん。蕪、こないなったん」と目を見張っていただけます。

野菜にはいろいろな成分とか機能性とか、そんなに高い含有量というのはいないのです。だけど、長く食べ続けると体にいいのかな、というのが薬ではなく、やっぱり食べ物の良さかなと思います。スピードは非常にゆっくりで、今のシステムで考えると合わないことばかりですが、在来品種の中にある本物性というのでしょうか、在来品種の良さをもう一度見直そうかなという取り組みをさせていただいています。

なにわ伝統野菜は、地域の発祥であった神社とかお寺のお祭りにこれを導入していただいています。例えば、天王寺蕪は、四天王寺さんを中心として、その地域で非常に大切に育てられ、食べられてきました。干し蕪として全国で有名であったことも踏まえて天王寺蕪の石碑なんかも建ててくれます。

それから、やっぱり次の世代に食というのは何かという種を蒔いていくことが大事なことだと思います。「大阪は“しんか”する庶民のまち」ということを挙げましたが、大阪には大陸からの文化が入っています、料理などでも和食・イタリアン・フレンチ・無国籍料理などがあり、食べるお客さんと作る人、材料を運ぶ人もいます。そういう意味では大阪っていうのは非常に面白いのかなという気がします。

### 「歴史文化野菜学からみた京野菜」

野菜文化史研究センター所長 久保 功



この40年間、お漬物或いは野菜の文化をどのように広め、教育資源としてどう活用するかを考えてまいりました。

1956年、私が高校生の時、日本で初めて国際遺伝学会議というものが京都で開催されました。

それを記念した論文集で、北村四郎博士の論文によって大根が地中海沿岸が原産であるということを知りました。「大根に歴史がある。ほんまかいな」というのが、その時の正直な感想でした。その他の多くの野菜が地中海沿岸や各地から、シルクロード、中国、朝鮮半島等を経て日本に渡ってきたことを初めて知ったとき、頭をガツーンと殴られたような感じでした。その時の出会いがなかったら、今日この場に私は立たせてもらえなかったかもしれません。文化、文化と言いながら、本当の文化とは一体何だろうかと、40年間みてきました。

ここに並んでおります野菜のほとんどが、世界各地からこの日本列島に「贈られた」という表現をしているんですけども、その歴史的事実を踏まえてもう一度伝統野菜を見直し、現在われわれが食べている野菜も含めてそこから、新しい価値観を引き出せるのではないかと確信しています。

やっぱり、私たちは、なぜいま食卓にこの野菜があるいは料理されたものが並んでいるのかを考える必要があると思います。農産物にしても、畜産にしても、食材にしてもその命を育てること、それが文化だと思います。ですから、野菜には、とてつもない文化力というか、「野菜の文化力」があります。

今、混迷の世界といわれている世の中で、日常の身の回りにあるものから、21世紀にわれわれが一体何をしなければならないか、現在の飽食社会とか食べ物に対してもう一度その評価をし直すことが大事です。今回、このなにわ・大阪文化遺産学研究中心が出来た時に、私は、皆さん方のいろいろな研究の中から、新しい哲学、すなわち「お返しと分かち合いの文化」が生まれてくるのではないかと密かに期待しています。

野菜文化には世界に通用するこの「お返しと分かち合いの文化」を形成する遺伝子が存在するのだと思います。各都道府県で大阪のまねをしてもらって、「良菜健母」の思想としてこの野菜文化を広めて頂きたい。

いつの時代も、命と健康を支える栽培作物など



◀ 鹿ヶ谷かぼちゃ

が、内外の先人達の命がけの働きによって、いま食卓にのっていることを、教育の中できっちり子供たちに伝えることが大事です。

### 参加者の感想（アンケート結果から）

- ・歴史的な視点からの話を聞いて、参考になった。“野菜には文化力がある” はいい言葉だ。
- ・関西に長く住んでいながら、なにわ野菜・京野菜の詳しいことは知らなかった。まして加工品になっているとは驚きだった。
- ・生活の基本食べ物の中で最も地味な対象である野菜が取り上げられて喜んでいる。
- ・卒業論文のテーマとして郷土食・伝統食を考えていたため、大変興味深かった。
- ・日常食べている野菜以外にこれほど大阪と京都に知られざる野菜の歴史文化があるのに驚かされた。その地域を訪ねた時には買い求めたい。

### 参加者が教えてくださった調理例

- ・万願寺とうがらしと賀茂なすの揚げびたし
- ・九条ねぎと慈姑<sup>くわい</sup>のピザ
- ・伏見とうがらしのベーコン巻き揚げ
- ・菊菜・聖護院大根が入ったてっちり鍋

など

\* 第2回 NOCHS レクチャーシリーズの準備として2005年12月22日には、生根神社のこつま南瓜まつり、12月28日には、法楽寺の大根煮会に参加しました。



生根神社

こつま南瓜まつり

今回のレクチャーシリーズでは、なにわ伝統野菜にたずさわっておられる多くの方がたのご協力を賜りました。心よりお礼を申し上げます。

(文責：P.D. 森本 幾子)





## 第2回 祭礼遺産研究例会

市川 秀之（祭礼遺産研究班 研究員）

「近世の民俗に対する知識人の関与

－河南町平石の祭礼を題材に－

2006年1月21日（土）

**祭**礼を含め、民俗を研究調査の対象とするうえで、そこに内包される伝承のルーツをたどることは大変重要です。しかし、現在残っている伝承のなかには、近世末期にあらたに創出された事例も時々みられます。第2回祭礼遺産研究例会では、市川秀之氏が発表者となって、河南町平石の祭礼を題材に、民俗学の立場から伝承や伝統の再検討をおこないました。

金剛山地西麓に接する大阪府河南町平石は、小さな村落ながら、歴史的な伝承を数多くもつ所です。中でも磐船伝承と平岩城の伝承は、在地の人びとの歴史意識の中で重きをなすものとなっています。平石を天孫降臨の舞台とする磐船伝承は、享和元年（1801）刊行の『河内名所図会』に記載されて、急速に広く知られるところとなりました。一方の平岩城伝承は、南北朝時代に当地の領主であった平岩茂直が、南朝方に味方して戦ったことを伝えるものです。これも『河内名所図会』に平岩城の伝承を記した碑文が紹介されたことから知名度を高めました。

ところが、市川氏の調査の結果、この平岩城碑は現実には存在せず、どうやら建立の計画段階の情報が『河内名所図会』に取り上げられたものであったことが判明しました。『河内名所図会』には、同じく平岩城伝承に関連して平岩氏の墓である「戦死塚」についても記されています。市川氏によれば、「戦死塚」は、碑文は南北朝時代の内容ながら墓石の形態はまったく近世の様式であり、おそらく天明年間（1781～1788年）に建てられたものであろうと推定されています。建立からわずか20年ほどしか経たない「戦死塚」が『河内名所図会』に採録されたことについて市川氏は、平岩城や平岩家、平石村などについてきわめて恣意的な記事の選択や誇張がおこなわれたためであろうという見解を示されました。

『河内名所図会』の作者の秋里籬島はその著述にあたって、地域の文化人と接触して取材の下請を依頼することも多かったようです。市川氏は、『河内名所図会』が発刊された時期の平岩家当主、平岩吉房もまた秋里籬島が接触したひとりであり、自家の存在を顕彰する内容を提供したのであろうと推測され、これを傍証する史料として平岩家の過去帳の中に秋里籬島の名前がみられることを紹介されました。

さらに市川氏は、平石に伝わる宮座儀礼についても、

一見きわめて古い儀式の形態を残しているように思えるものの、近年の研究の結果、河南町にゆかりの深い慈雲尊者（享保3年～文化元年（1718～1805））が開いた葛城神道の影響が濃厚であることを示唆されました。

18世紀以降、知識人と在地の有力者とが接触する中で、国学の在地への普及とあいまって民俗や伝承の創出、再構成がおこなわれてきました。とりわけ大阪では、平石のような小さな村落においても知識人の関与を確認することができ、現在私たちがみることのできる民俗儀礼を過去にさかのぼるにあたっては、特別に慎重な姿勢が必要であろうという市川氏のまとめの言葉が呼び水となり、その後、参加者全員を交えた活発な討論が繰り広げられました。

（文責：R.A. 内田吉哉）

## 第2回 生活文化遺産研究例会

千葉太朗・宮元正博（生活文化遺産研究班 R.A.）

「道明寺天満宮 3D スキャニング調査概報」

妻木宣嗣（大阪工業大学講師）

「寺社境内とその周辺における

「にぎわい」空間について」

2006年1月28日（土）

**今**回の例会では「にぎわい」空間というものをテーマに、このテーマに係わる研究の具体的内容や方法、意義などについての報告と、3D スキャニング調査の報告が行なわれました。

「にぎわい」空間とは、寺社空間における信仰的側面以外の参拝者のアミューズメント性、つまり、祭礼時や縁日などにおける「にぎわい」を構成する空間であり、寺社空間やその周辺、門前町に構成されるものです。そこで、寺社空間のなかに「にぎわい」性を構成するなんらかの工夫が埋め込まれているという仮説を前提に、これまで考慮されなかった店側の視点で寺社空間をみると、「にぎわい」を利益に結びつける工夫が、あるものは洗練され、あるものは淘汰され現在の「にぎわい」を構成していると考えられます。また、客観的に認識できる要素を抽出することで、「にぎわい」構成法を具体化し、この具体化があるエリアにおける歴史と文化の産物、つまり文化遺産として捉えられると考えられます。「にぎわい」構成要素の可能性として、店舗の立地と種別、道幅、道幅と関連して空間密度、参道の傾斜などがあげられ、店側の工夫として商品のディスプレイなどが考えられ、これらを比較・検討することで「にぎわい」構成法の具体化を計ります。

そして、方法論として1950年代にJ.J. ギブソンが提唱した概念「アフォーダンス」を用いることで、「にぎわい」構成要素が参拝者の行動をアフォードする、すなわち参拝者が行動させられていると考えることができま

す。さらに、「シークエンス（続いて起こること、連鎖など）」という概念を用いることで、参拝者はシークエンスを考慮した仕掛けによってアフォードされている可能性が指摘でき、この仕掛けがにぎわい、あるいは参道におけるアメニティー性を構成していると考えられます。

また、このような「にぎわい」空間を目で見える形で示すことができれば、過去から今後の「にぎわい」空間を考える上でのヒントを見つけ出すことができると考えられます。そこで、3D スキャニングシステムを使用し、境内及びその周辺をスキャニングすることで3Dデータとして視覚的に示すことができ、店側の視点、参拝者の視点を考慮した「にぎわい」空間を再現できると考えています。その第一歩として、2005年12月5日から10日まで道明寺天満宮にてスキャニング調査を行いました。今回の調査で、事前調査の重要性やバッテリー使用のため調査時間が制限されるなど多くの問題点が浮き彫りとなりました。

今後生活文化遺産班では空間について、以上のようなテーマ、内容で研究していこうと考えています。

（文責：R.A. 千葉太郎）

## 第2回 学芸遺産研究例会

松本 望（学芸遺産研究班 R.A.）

「鬼洞文庫一枚摺調査の経過報告と今後の展望」

北川博子（（財）阪急学園池田文庫研究員）

「関西大学図書館蔵『上方芝居絵帖』・

『一養亭芳瀧筆画帖』について」

2006年1月28日（土）

今回は関西大学図書館所蔵の摺物資料、鬼洞文庫一枚摺と上方役者絵を素材に報告を行いました。

松本報告では、鬼洞文庫一枚摺のなかで着目すべき一枚摺を分類別に紹介し、夏期に調査を行った商品切手と引札について、調査要領や特徴を詳述しました。

特徴として、商品切手は菓子・酒類の切手が多いこと、引札については正月引札や堺市内の店が出している活字印刷の広告が多いことを挙げました。引札における正月引札と堺の広告の性格の相違は、蒐集者である出口神暁氏の意識の相違を反映しているのではないかと指摘し、さまざまな視点から鬼洞文庫一枚摺を捉えなおすことと、鬼洞文庫の蔵書との比較対照を試みることを今後の展望としました。

鬼洞文庫一枚摺には守口大根、難波鴨瓜、天王寺蕪の名前が見える漬物の番付（「蒙御求」【請求記号：L22\*596\*\*21】）や住吉大社の神事を描いたもの（「住吉神社卯の葉神事行列之図」【L22\*176\*\*14】）など、当センターとかかわりの深い資料が多数見られます。また質疑応答時にさまざまな論点からご意見をいただいたことで、鬼

洞文庫一枚摺の資料的価値の高さを再認識しました。

北川報告では、上方役者絵をめぐる状況や研究史、大坂役者絵の系譜を説明した後、関西大学図書館に収蔵されている『上方芝居絵帖』、『春江齋北英画上方芝居絵』、『一養亭芳瀧筆画帖』の役者絵について、画中に描かれた文字や上演情報、配役、摺師・彫師、板元など詳細に説明されました。

『上方芝居絵帖』は春江齋北英や柳斎重春の作品が中心に収められ、三代目中村歌右衛門を描いたものが多いこと、『一養亭芳瀧筆画帖』は芳瀧が最も優れた作品を残している文久年間のもので中心で芳瀧を再評価するためにも貴重な画帖であること、芝居番付などの上演資料との比較対照による年代特定の過程など、興味引かれるお話を数多く聞くことができました。

上方役者絵は海外では高く評価されているのに対して、日本ではその存在があまり知られていません。しかし昨年、坂田藤十郎襲名、大阪歴史博物館での「日英交流 大坂歌舞伎展—上方役者絵と都市文化—」の開催などにより、上方歌舞伎やその関係資料に対する視線が集まりつつあります。

関西大学図書館には、今回紹介した上方役者絵をはじめ、現在ホームページ上で公開されている「長谷川貞信コレクション」も収蔵されており、歌舞伎や上方浮世絵研究の進展に大きく寄与することが期待できます。

当日は、ロンドン大学のAndrew Gerstle（アンドリュー・ガーストル）氏をはじめ他大学の研究者の方がたも多数来られました。報告後はいずれも活発に議論が交わされ、上方役者絵あるいは鬼洞文庫一枚摺に対する関心の高さをひしひしと感じました。

（文責：R.A. 松本 望）

## 第1回 歴史資料遺産研究例会

櫻木 潤（歴史資料遺産研究班 R.A.）

「なにわ・大阪の歴史資料調査

～歴史資料遺産研究班の第一歩として～」

2005年11月26日（土）

歴史資料遺産研究班では、初年度である今年、なにわ・大阪に関する歴史資料が、どのような所蔵機関に所在しているのかという基礎的所在調査を中心に活動を進めています。第1回研究例会では、その活動内容について報告しました。

歴史資料遺産研究班の調査計画は、①基礎的所在調査、②関西大学所蔵資料調査、③出張調査となっています。①は、『東京大学史料編纂所報』や国宝・重要文化財一覧などを用いて所蔵機関を調査しており、大阪府内や大阪府外の大坂に関する歴史資料が所蔵されている機関を紹介しました。②は、今年度行った関西大学博物館所蔵の本山コレクション拓本類の調査結果を報告しました。

これらの拓本は『大日本金石史』の著者木崎愛吉氏が収集し、のちに大阪毎日新聞社社長の本山彦一氏の所蔵になったものです。今年度は、全部で1200点あるうち、軸装されている126点について、時代・軸の長さ・『大日本金石史』掲載の有無などの10項目について調査を行いました。調査の結果、拓本には手拓された年月日を記したものがあり、それをもとに木崎愛吉の拓本収集の経過を知ることができることや『大日本金石史』に掲載されていないものが多くあることもわかりました。③は、①の基礎的所在調査で見出された所蔵機関のうち、出張調査を行った高野山大学図書館の所蔵資料について報告しました。高野山大学図書館には、大阪市内の寺院から寄託された資料が所蔵されており、それらのなかには大阪の寺院や僧侶の名前が見えるものがあります。それらをくわしく分析することで、近世の高野山と大阪の真言宗寺院との関係や僧侶の動向を知ることができると考えられ、貴重な資料であるといえます。

歴史資料遺産研究班では、今後も、①～③の活動計画にもとづいて、なにわ・大阪の歴史資料遺産を発掘していきたいとして報告を終えました。

報告後には、本山コレクションの拓本類について、現地調査をすべきであるといった意見や南朝史観が中心であった明治時代の大阪で木崎愛吉氏がどのような意識で拓本を収集したのかを考察することも重要であるといった意見が出されました。また、基礎的所在調査として、大阪府下の市町村史に記載されている資料のリスト作成が必要であるといった指摘がありました。今後の活動では、戦災で焼失した資料の発掘や、川崎東照宮などのかつて大阪にあり現在は廃絶してしまった寺社について取り上げるのもおもしろいのではないかといった提案がありました。

暮れ行く秋のひとつき、フロアからさまざまな意見が活発にだされ、歴史資料遺産研究班の次の一歩にとって有意義な研究例会となりました。

(文責：R. A. 櫻木 潤)

## 第2回 歴史資料遺産研究例会

「古代難波津論」

若井敏明 (関西大学非常勤講師)

「古代の難波津—その位置論を中心に—」

西本昌弘 (関西大学文学部教授・

歴史資料遺産研究班 P. L.)

「平安時代の難波津」

2006年2月27日 (月)

古 代の大阪を考える場合、難波津は重要なテーマのひとつです。第2回研究例会では、「古代難波津論」をテーマに取り上げました。今回は、位置論を中心に若井敏明氏からご報告していただき、西本昌弘氏からはこ

れまであまり取り上げられることがなかった平安時代前期の難波津についてコメントをしていただきました。

若井報告では、まず、難波津の位置をめぐる、三津寺町説と高麗橋説の二説があることが紹介されました。若井氏は、現在では少し内陸部に入った高麗橋説が有力とされているものの、『続日本紀』天平勝宝五年(753)九月壬寅条や『延喜式』雑式に、難波津に関して「海浜」・「海中」とした記述があることから、難波津は海に面していたことがわかり、三津寺町説が妥当であるとする見解を述べられました。また、『古事記』仁徳天皇段の伝承を地図上に再現され、三津寺町説を補強しました。さらに、難波津は「難波御津」と呼ばれており、三津寺町には現在も御津八幡宮が所在することから、地名でも難波津が三津寺町付近にあったことが推定できるとされました。報告後には、三津寺が大福院と呼ばれ、行基開創伝承を持つ寺院であることに関して、行基の活動と奈良時代の難波津についての質問が出されました。行基と大福院との関わりは、聖武朝の後期難波宮造営に関係するものであり、行基が淀川周辺でも活動していることから考えると、当時「難波宮・淀川総合開発プロジェクト」というような国家プロジェクトがあり、それに行基が深く関わっていたのではないかと行基の研究者である若井氏の考えを披露してくださいました。

若井報告について、西本氏のコメントは、延暦四年(785)の淀川と三国川(神崎川)の直結工事や延暦十二年(793)の難波宮・摂津職の停廃によって、平安時代の前期には難波津が衰退したとする現在の認識に再考を促すものでした。『新修大阪市史』や『大阪府史』に記載されている難波津に関する史料から、規模を縮小しながらも難波津を通じた経済活動は継続していたことがうかがえるとされました。延暦や承和の遣唐使に関する記事からは、難波津が海に面していたことがわかり、平安時代前期の史料からも若井氏の論じた三津寺町説が補強できるとされました。また、これまで知られていた史料のほかに『凌雲集』や『入唐五家伝』所引の「頭陀親王入唐略記」に難波津に関する記述が見出され、これらからも平安時代前期に難波津が盛んに利用されていたことがわかると述べられました。

難波津をめぐる研究には多くの蓄積があり、その研究はすでに到達点に達しているかのようなのですが、今回の研究例会で、まだまだ多くの課題が残されていることに気付かされました。難波津に関する史料の発掘などは、今後、センターが取り組むべき課題であるとの西本氏のまともに一同大いになづき、今年度最後の研究例会を締めくくることができました。

(文責：R. A. 櫻木 潤)



## 書籍紹介

大阪歴史博物館・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編集・  
発行『日英交流 大坂歌舞伎展 ―上方役者絵と都市文化―』  
2005年 302p.



本書は、大阪歴史博物館および早稲田大学坪内博士記念演劇博物館で開催された「日英交流 大坂歌舞伎展―上方役者絵と都市文化―」の展覧会図録であり、第2回学芸遺産研究例会にお越しくださいました Andrew Gerstle (アンドリュー・ガーストル) 氏が主となって執筆編集されています。

表紙の二代目嵐吉三郎(璃寛)と三代目中村歌右衛門(芝翫)が描かれた見立絵をはじめとして多数掲載されている上方役者絵も圧巻ですが、役者の襲名披露や追善法要などの記念に制作された摺物や、役者絵や芝居番付などを貼り付けた貼込帖が紹介されていることにより、役者や最前連中といった上方歌舞伎を取り巻く人びとの動向を垣間見ることができます。

役者が俳諧や狂歌を詠む文芸サークルに参加し文芸活動に興じる姿、熱狂的なファンがお気に入りを集めた貼込帖を見ながら最前の役者や大好きな芝居に思いを馳せる姿は現代にも通じ、親近感が湧いてきます。

本書にはほかにも資料が数多く収録され、バラエティに富んでいます。関西大学図書館からも、番付や役者絵、役者評判記の役者目録の写しなどを貼り付けた貼込帖『許多脚色帖』が出品されています。また一点一点の解説が詳細で、大坂歌舞伎に関する参考資料としての性格も兼ね備えています。

大坂歌舞伎の魅力を存分に堪能できる一冊です。

(文責：R. A. 松本 望)

## なにわ・大阪文化遺産学研究中心今後の予定

2006年

- 5月13日(土) 13:00~16:30  
第1回ワークショップ「天王寺舞楽の魅力」  
解説：小野功龍氏(天王寺楽所雅亮会理事長)  
演者：天王寺楽所雅亮会
- 6月 3日(土) 第1回学芸遺産研究例会  
6月24日(土) 第3回NOCHSレクチャーシリーズ  
水田紀久氏(木村兼葭堂記念会代表)  
Andrew Gerstle氏(ロンドン大学SOAS教授)
- 7月 1日(土) 第1回祭礼遺産研究例会  
7月28日(金) なにわの日「八尾植田家現地説明会」  
9月 第2回ワークショップ「茶釜と茶菓子」  
10月14日(土) 地域連携企画第二弾「八尾安中新田植田家の文化遺産」(於：八尾市 竜華コミュニティセンター)  
10月28日(土) 関西大学第120周年記念事業企画  
シンポジウム「日本の中の大阪文化遺産」  
基調講演：高橋隆博氏(センター長)  
箏の舞楽：天王寺楽所雅亮会  
11月25日(土) 第3回文化遺産学フォーラム  
「街づくりと文化遺産」(於：りそな銀行本店)  
基調講演：神野直彦氏  
(東京大学経済学部教授)

## 編集後記

『難波瀉No.3』をお送りいたします。なにわ・大阪文化遺産学研究中心は、新しいセンター棟が2006年3月9日に竣工式を迎えました。常時P.D.、R.A.は、広々とした快適な研究空間にて調査・研究にいそしんでおります。

今度とも、皆様にご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

(P.D. 森本 幾子)

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業  
オープン・リサーチ・センター整備事業

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究中心News Letter「難波瀉(なにわがた) No.3」

発行日 2006年5月13日

発行所 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究中心

発行者 高橋隆博

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

TEL 06(6368)0095 FAX 06(6368)0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/home.htm>

E-mail:naniwa@jm.kansai-u.ac.jp

編集協力 (株)廣濟堂